

(別紙1)

論文の内容の要旨

氏 名	足立美香		
論文題目	小集団における「逸脱の相互作用論」に関する研究 ——三者関係としてのラベル付与と被排除者の再生——		
審査委員	区 分	職 名	氏 名
	委員長		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
内 容 の 要 旨			
<p>学校におけるいじめや排除は依然として大きな問題であり、近年では教職員同士のいじめ・排除も大きな社会的問題となっている。</p> <p>本論文は、学校におけるこうした排除の問題を研究対象とし、小集団と其中的の個々人の行為選択に着目する視点から、排除のメカニズムの解明やその分析枠組み作りに取り組んだものである。</p> <p>いじめ・排除などに関する理論的概念を提出した社会学的古典に、ハワード・ベッカーの『アウトサイダーズ』(1963)がある。ベッカーはこの著作で、逸脱者の側に原因を求めた従来の思考に対して、ある人物に逸脱者というラベルを貼る側の行為(ラベリング)が逸脱という現象を作り上げるという正反対の議論(ラベリング論)を提唱した。ラベリング論は逸脱研究に多大な影響を及ぼしたが、その一方では発表直後から様々な議論を呼び起こしてきた。ベッカーは後にラベリング論の不十分さを一部認め、この理論を発展させた「逸脱の相互作用論」とでも言うべき分析枠組みの必要性を提唱することとなった。しかし、その理論枠組みの具体像については明らかにされないまま現在に至った。</p> <p>本論文は、こうした未完の「逸脱の相互作用論」の具体化、発展を目的に、(1)ラベリング論争の理論的再考察、そしてそれを考える対象として(2)学校における排除現象の実証的調査、の2つの柱から取り組んだものである。</p> <p>次に、本論文の構成と内容について見ていく。</p> <p>本研究は、付論を除き、大きく3つのパートから成っている。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・第一部 理論的考察：ラベリング論・逸脱の相互作用論の検討と分析方針の提出(第1章)</li><li>・第二部 実証研究：学校における被ラベル付与者から見た逸脱現象の分析(第2～4章)</li><li>・第三部 実証研究：学校における被ラベル付与者の生活継続プロセスの分析(第5・6章)</li></ul>			

第一部（第1章）は、先述のように、ベッカー著『アウトサイダーズ』に始まるラベリング理論提起・批判・反批判の理論的考察である。考察より、ラベリング理論を「逸脱の相互作用論」と捉え直す視点から、㊦ラベル付与者、被付与者という二者関係で捉えられてきたラベリング過程には、ラベル容認者の存在を加えて三者関係で捉える必要性、㊧いわゆる不良グループのような逸脱集団の分析だけでなく、単数（個人）の被ラベル付与者の存在に着目する必要性、㊨特殊な時空間での現象ではなく、日常生活上の小集団においてラベリングが始まり持続する過程への着目の必要性、の三点から実証研究を行なうという、「逸脱の相互作用論」展開の方向性を提出した。

それに基づき第二部からは学校現場を対象とした調査研究となる。

第二部（第2・3・4章）は、ラベル付与者、被付与者、容認者の三者関係からみた、ラベル付与・ラベル容認そして排除へと至るラベリング過程（ラベリングの生成、発展のプロセス）についての分析である。

まず第2章は、教員集団の慣行である生徒や家族に関する「申し送り」が、ラベル伝承の場となっているという負の側面を独自の調査から示した。それは、ラベリングの対象が拡大するという側面とラベリングが過去から現在へと向かう中で昂進されるという2つの側面であった。後者については、検証なき「申し送り」が教員の間で行われることで、ラベリングの素地が「伝承」され容認されていくという過程が明らかにされた。

第3章では、2つの市における教員組合と教員の軋轢を比較検討し、当該教員を取り巻く状況の違いと行為選択について検討がなされた。集団からの排除は、集団を代表する「小さな権力者」個人の寛容度によって決定づけられており、「小さな権力者」の許容範囲の狭長がラベル容認者を生じさせることが、詳細な調査に基づき明らかにされた。

第4章では、ラベルを付与され、支援されなかった新任教員の自殺後、その遺族による公務災害認定裁判を事例に、長時間勤務と支援の欠如、ラベル付与過程と行為選択、さらに司法的事後救済の限界について考察がなされた。当該学校の大多数の教員が支援できない状況であったことがラベル付与の容認（ラベル容認者化）につながったことが論じられた。

第三部（第5・6章）は、被ラベル付与者が、その後の生活をいかに継続させたか、あるいは継続できなかったのかについて、ラベリング過程の延長線上にある生活の継続プロセスに焦点が当てられた。

第5章は、教員としての生活の連続性を維持できたベテラン教員2名と、自殺によって生活の連続性を絶たれた新任教員2名の相互作用過程の相違に着目し、ベテラン教員の逐語録をもとに、日常生活上の小集団（教員集団）から排除された被ラベル付与者がどのように生活を継続したのかについて検討し、その継続の可否を分けた要素が明らかにされた。

第6章は、被排除者となった個人の生活継続プロセスを類型化することが試みられた。ベッカーのラベリング論では視野の外にあった、被排除者の生活の継続プロセスの存在・重要性についての整理が行なわれた。

終章で著者は、ここまでの調査に基づき、「逸脱の相互作用論」には、（1）ラベル容認者を含んだ三者関係においてラベル付与を論じる必要（ラベル容認者の要因とパターンの整理も含む）、さらに（2）被ラベル付与者の生活の継続プロセス（再生過程）も視野に入れる必要（ラベリングの状況変化における容認者の役割の具体的指摘も含む）、の重要性を提出し、逸脱の相互作用論の発展方向性・可能性を論じて結論とした。

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏 名	足立美香		
論文題目	小集団における「逸脱の相互作用論」に関する研究 ——三者関係としてのラベル付与と被排除者の再生——		
審査委員	区分	職 名	氏 名
	委員長		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
要 旨			
<p>本論文は、逸脱研究の古典、ラベリング論に関する議論を丁寧に追ひ、それを過去のものとして否定するのではなく、その有効性を十分理解したうえで改良的に発展させていこうとする試みであり、その手堅い研究姿勢は評価できる。またラベル付与の要因として内部的要因と外部的要因の2類型化や、ラベルを他の構成員が受け入れる背景として、①「検証なき申し送りでの検証の免除という不作為」、②「無答責であるという自己防衛反応」、③「言いたくても怖くて言えないという自己防衛反応」など、ラベリング過程における「容認」に関する知見をより詳細に整理・提出した点は本論独自の貢献といえる。こうした考察を経て、ラベリングをラベル付与者・被付与者、そしてラベル容認者という三者関係で捉え直すという広い視野へ拡張することの必要性を説得的に示したことは本論の成果と認められる。</p> <p>さらに、ラベル付与・容認・排除というラベリング過程が成立した後も、被ラベル付与者においては生活の継続のために排除からの再生という重要な過程（再生過程）が存在することを指摘した。そして、「再生過程」は被ラベル付与者からすれば、同時に孤立感・疎外感からの「回復過程」でもあることを事例調査より示し、「再生過程」はラベル付与・容認・排除というラベリング過程によって惹起されたものであると指摘した。このように、逸脱理論が単に排除の過程だけでなく、そこからの再生過程をも視野に含むべきであるという提案へと説得的に至ったことは、今後の逸脱研究に大きな影響を与えうるものである。</p> <p>こうした成果の背景には、長年の学校勤務というキャリアを活かし、関係者への丁寧な聞き取り調査を実施した筆者の粘り強い姿勢があり、その結果、小集団内部での排除につながる相互作用の過程や権力関係、さらにその変容が詳細に捉えられている。これらの調査姿勢や貴重なデータも本論文の価値を高めている。</p>			

また、一次データのみに留まらず、裁判記録の収集とその丁寧な読み込み、関連資料や統計などの幅広い収集と分析など、二次データへの目配りもできており、考察結果の一般性を高めているといえる。

さらに、付論において、よりマクロで構造的な観点（「逸脱の相互作用論」の三者関係の外に存在する外部的要因）への考察を行なった点も評価できる。制度的問題として、教育社会学からも指摘されている今日的課題である「教員の疲弊」に対する文部行政の構造的な問題を取り上げ、行政と司法の文書から疲弊していく教員への十分な支援はいかに可能かについて示した。本論での分析対象や視点は個人や教員集団といったミクロな小集団に焦点をあてているが、付論においてはバランスよくマクロな研究対象領域への広い視野と研究成果がみてとれる。

繰り返しになるが、本論文はこのように、実証面・理論面の二つの側面から逸脱の社会学の発展に貢献した労作といえる。本論文は、学校における排除の様相とそのメカニズムの詳細を明らかにすると同時に、それらをより有効に分析し課題解決へと導く視点を抽出し、未完であった「逸脱の相互作用論」の発展に資する理論的貢献をするにいたっている。

学校における排除の問題は、構造的・マクロ的な要因も大きく、その点が付論でしか触れられていないことや、排除から再生へと進む過程における支援者の役割など、論文中で指摘されているが考察が不十分な部分も見受けられる。しかし被排除者個人に視点をおきつつ職場の現実から議論を展開することの重要性から書かれた本論文の意図や成果を考えると、それらは本論全体の価値を下げるものとはいえないと考えられる。

最後になるが、近年、教員間でのいじめ・排除が大きな問題として取り上げられており、この問題を早くから地道に研究して成った本論文は、時宜にもかなうものであり、大きな社会的意義をもつといえる。

なお、本論文の内容は、査読付の学術誌『奈良女子大学社会学論集』に3本掲載されており（3月掲載予定1本を含む）、社会生活環境学専攻・社会地域学講座の学位取得基準に関する内規を満たしている。

よって、本学位申請論文は、奈良女子大学博士（社会科学）の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断した。